

やよい図書館TOPICS

館長が紹介する「印象に残った一文」とは？

フレーズ
&
センテンス

「ああ、楽しい。」

ビブリオバトルが好きです。自分の好きな本をおすすめできる時間、今まで全然知らなかつた本との出会い、チャンプ本を選ぶドキドキする瞬間…。なによりの魅力は、本をきっかけにして新しい友だちができること！この本の主人公、空（そら）もビブリオバトルに出会い、様々な本、そして様々な人に出会います。読書の楽しみをたくさんの人と共有すること、それがこんなに楽しいことなど教えてくれたのが、ビブリオバトルであり、この本でした。

『翼を持つ少女 BIS ビブリオバトル部』山本 弘／著 東京創元社

（丸山）

「誰か×誰か」「誰か×何か」の組み合わせが面白い！

こち亀×人気小説家たち（東野圭吾・石田衣良・京極夏彦 他）

『小説こちら葛飾区亀有公園前派出所』秋本 治／原作 集英社

週刊少年ジャンプで1976年から連載している人気漫画「こちら葛飾区亀有公園前派出所」と人気小説家たちがコラボレーション！こち亀のキャラクターたちだけではなく、『池袋ウエストゲートパーク』のマコト、保育士探偵の花咲真一郎などテレビドラマ化された人気作品の登場人物も出てきます。両さんのハチャメチャな性格、人情味あふれる展開は原作のまま、小説にも表れています。こち亀好きも人気小説家のファンもどちらも楽しめる一冊です。ちなみに千住のおばけ煙突も登場しますので、ぜひ探してみてください。（大塚）



Cinema
library

第24回 きっと、星のせいじゃない

★原作「さよならを待つふたりのために」著者：ジョン・グリーン 訳：金原瑞人・竹内茜

★映画「きっと、星のせいじゃない」監督：ジョッシュ・ブーン

主人公は不治の病にかかった若い男女。と聞くと暗く悲しいラブストーリーを思い浮かべる人が多いのではないでしょうか。しかし、この物語は明るさと希望に満ちています。

16歳のヘイゼルは甲状腺がんが肺に転移して以来、酸素ボンベが手放せない生活。ある時両親に言われいやいや参加したがん患者の集会で、骨肉腫で片足を失ったガスと出会い、互いに惹かれています。そして二人は大好きな作家に会いにオランダへ旅立ちます。しかし、そこで待っていたのは作家の予想もしない言葉でした。さらに旅の最後、ガスはヘイゼルに重大な事実を打ち明けるのです…。

死を見つめながら、限られた時間のなかで精一杯生きる2人にはこちらも勇気をもらい、「生と死」について考えさせられます。また、病気の子どもを持った家族とのやりとりも丁寧に描かれています。ぜひハンカチを用意してお楽しみください。

次回は「のぼうの城」です。お楽しみに！（坂井）



読書の窓



次回の読書の窓は
5月号です。

その月ならではのテーマを特集。全てやよい図書館で借りられます。

3月「未来郵便」

数年後の指定した日に手紙が届く「未来郵便制度」をご存知ですか？今回は、そんな「未来郵便の日」である3月1日（「みらい」）にぴったりな、面白い本をご紹介します。

『十頁だけ読んでごらんなさい。十頁たって飽いたらこの本を捨てて下さって宜しい。』

遠藤周作／著 新潮社

「魅力的な手紙」とは、一体どんなものでしょう。自分の気持ちが伝わるもの？相手の気持ちを動かすもの？本書では「心に届く」手紙の書き方を、ユーモアたっぷりの文章で紹介しています。ぜひ読んでほしい1冊です。…が、もし十頁読んで飽きてしまっても、どうか捨てずに図書館までご返却を。（新井）

『時の罠』

辻村深月／著 文藝春秋

辻村深月・湊かなえ・万城目学・米澤穂信の4人による、「時」をテーマにした短編集です。4編すべて読み応えがあって面白いのですが、中でも辻村深月さんの「タイムカプセルの八年」という話は、息子のために頑張るお父さんのお話。タイムカプセルを埋めた当人ではなく、そのお父さんが主人公のお話という、ちょっと変わったお話です。（丸山）

『星空の楽しい話をしましょう。』

駒井仁南子／著 誠文堂新光社

星座や宇宙に関する面白い話がたくさん詰まった1冊です。たとえば、今私たちが見ている星の光は、実は何千年前にその星から出発した光なんです。もし、その星が燃え尽きてしまっていても、私たちがそれを知ることができるのは何千年后の話…。そんなことを聞くと、なんだか過去からの壮大な手紙を受け取っている気分になりませんか？（丸山）

・『パパ、ママ、あいしてる エレナが残したメッセージ』

ブルック・デザリック／著 早川書房

・『マボロシの鳥』

太田光／著 新潮社

4月「白」

4月6日は語呂合わせから「シロの日」肌への意識を生むきっかけになるよう美肌の日ともされています。ということで、4月は白にまつわる楽しい本をご紹介します。

『ホッキョクグマの親子』

ノアバート・ロージング／写真と文 二見書房

白い雪の上を歩く白熊の親子。名前の通り、1冊まるまる可愛いホッキョクグマの親子の写真が詰まっています。お母さんの背中によじ登ったり、兄弟でじゃれあったりする小熊の姿は見ているだけで癒されます。その他にも、キツネやアザラシ、セイウチなどなど、北極に暮らす様々な動物の姿が見られる、飽きない1冊になっています。（竹原）

『紙の道 ペーパー・ロード』

陳瞬臣／著 読売新聞社

普段何気なく使っている「紙」。けれど、この紙が現在のような形になり、その製法が各地に伝わった背景には、驚くほどたくさんのドラマがありました。この本では、古代中国で蔡倫が現代のような「紙」を作りだし、それが西方へ伝わってゆく様子が、様々な歴史的ドラマと共に語られています。文明の発展は「紙」に支えられていた！と感じる1冊です。（丸山）

『ホワイト・ダークネス』

ジェラルディン・マコックラン／著 あかね書房

シムは南極が大好きな女の子。学校のみんなにはパワーにされるけど、南極隊の冒険ならなんでも知っていて、頭の中のタイタス・オーツ隊員に恋してる。そんなシムが仲良しのおじさんと南極ツアーに出かけることになったのだけど、おじさんには何やら危険な企みがあるよう…。シムの勇敢さと恋模様から目が離せなくて、一気読みしたくなる物語です。（丸山）

・『白い池 黒い池』

リタ・ジャハーン=フォルーズ／再話 光村教育図書

・『白いからす』

ほんまわか／作 自由国民社